

コミュニティカフェ開催の試み

—音なりカフェの運営における成果と課題—

山本 奈美江^{*1} 西田 征治^{*2} 綾 里穂^{*3} 栗川 佳奈^{*4} 松本 美月^{*5}

- *1 広島中央リハビリテーション病院リハビリテーション部
- *2 県立広島大学保健福祉学部作業療法学科
- *3 三豊市立西香川病院リハビリテーション科
- *4 特定医療法人大慈会三原病院作業療法部
- *5 福山リハビリテーション病院リハビリテーション部

2020年8月25日受付
2020年12月24日受理

抄 録

本研究では、三原市で全3回コミュニティカフェを試行的に開催し、その成果と課題を明らかにすることを目的として、参加者への自己記入式アンケート、運営協力者へのインタビューの内容を量的質的に分析した。その結果、【参加者を継続して集客できたこと】【参加者に「居心地が良い」といった感情の変化があったこと】【運営に携わりたいとする参加者が現れたこと】など5つが成果として挙げられた。一方、課題として試行したコミュニティカフェを継続するには、【運営協力者との目的や内容の共有】【運営の仕組みの構築】【参加者への運営参加の動機づけ】など7つが重要であると分かった。コミュニティカフェで知り合う関係から支え合う関係を構築するためには、特に立ち上げの段階から地域住民と協働することが必要であると考えられる。

キーワード：コミュニティカフェ、運営、地域、協働

1 はじめに

近年、認知症や引きこもり等の高齢者とその介護に悩む家族、子育てに悩む母親など複雑化・多様化した地域課題の解決は行政のみでは追いつかず、住民による地域福祉活動に期待が寄せられている。厚生労働省は、市町村による新しい地域づくりを推進しており¹⁾、そこで注目されているのが、コミュニティカフェである。倉持²⁾は、コミュニティカフェを「飲食を共にすることを基本に、誰もがいつでも気軽に立ち寄り、自由に過ごすことができる場所」と定義し、地域住民が知り合う関係から支え合う関係を構築するきっかけになるとしている。一般的なカフェは営利目的であるが、コミュニティカフェは、人が集まることを目的としており、その場をマネジメントするスタッフが存在する場合が多い。そのため、一般的なカフェよりも人が地域と繋がるきっかけの場として注目されている。しかし、研究開始当初、コミュニティカフェは三原市に普及しておらず、設置が課題と考えられた。そこで本研究では、三原市で「音なりカフェ」と称し全3回のコミュニティカフェを試行的に開催して、その成果と課題を検討したので報告する。

2 方法

2.1 対象

2.1.1 対象のコミュニティカフェ

対象のコミュニティカフェは「音なりカフェ」と称し、地域の人々が交流することで、コミュニティカフェについての理解を深め、その運営に協力できる人材を育成することをコンセプトとした。会場は三原市の主要駅前にある定員20名で、普段は音楽イベントを実施するなど、音楽機材やプロジェクターを完備しているカフェだった。通常、定休日である曜日を音なりカ

フェ試行的のため午後の約2時間営業する協力を得た。

音なりカフェは、2018年12月～2019年2月の期間に月に1度、各2時間開催した。運営は、作業療法士1名と作業療法を学ぶ大学生4名が行った。会場としたカフェの経営者（以下、運営協力者）は2名で、開催場所の提供だけでなく、毎回イベント実施に協力した。参加者の募集は、開催の1ヶ月前よりチラシを会場としたカフェに隣接する2地区へ回覧板で配布した。募集人数は15名とし、高齢者や子育て中の人など対象に限りなく参加者を募った。また、継続参加を希望する人から先着順で申し込みを受け付けた。参加費は300円とし、毎回飲み物とお菓子を提供した。運営資金には、参加費と公的機関からの助成金を充て、参加者1名につき、運営協力者へ協力資金として1,000円を支払った。毎回、全体で自己紹介を行い、最後に運営協力者によるギターの生演奏を伴奏に歌を歌った。各回の内容は表1に記載する。

2.1.2 対象者

音なりカフェの成果と課題を検討するためのデータ収集の対象者は、音なりカフェの第3回目の参加者、および運営協力者2名とした。

2.2 データ収集

2.2.1 参加者数と属性

実際に音なりカフェ開催日に参加した人数をカウントし、最終的な延べ人数を計算した。参加者の性別と年齢は参加申込書に記載させ、情報を集めた。

2.2.2 アンケート

第3回の参加者へ無記名の4件法によるアンケートを実施した。内容は、「音なりカフェについて」「コミュニティカフェについて」「自己効力感について」に関する全18項目であった。

2.2.3 インタビュー

第3回の終了後、運営協力者2名へ半構造的インタ

表1 音なりカフェの実施内容

回	月/日	実施内容
第1回	12/20	<ul style="list-style-type: none"> 音なりカフェの趣旨説明と自己紹介 飲食、交流 ギターの生演奏による合唱（クリスマスソング）
第2回	1/17	<ul style="list-style-type: none"> 飲食、交流（話題カードで地域課題の共有） 運営協力者によるコーヒーの美味しい淹れ方講座 ギター生演奏による合唱
第3回	2/7	<ul style="list-style-type: none"> 飲食、交流 ミニ講義（コミュニティカフェ、認知症の人への対応方法） ギター生演奏による合唱

ビューを実施した(1時間程度)。会話はICレコーダーを用いて録音した。質問項目は、「音なりカフェについて」「音なりカフェを継続していくための課題」であった。

2.3 分析方法

参加者数、アンケート結果、ICレコーダーで録音した会話の逐語録をもとに今回の試みにおける成果と課題を分析した。参加者数やアンケート結果は、カウント数をもとに量的に傾向を分析し、成果と課題に該当する部分を質的に分析した。成果はアンケート結果より抽出し、課題はアンケートとICレコーダーで録音した会話の逐語録より抽出した。質的分析は、筆者ら5名で検討しながら合意が得られる形で行った。

2.4 研究倫理

本研究を実施するにあたり、対象者に書面と口頭にて説明を行い、研究協力を得た。また、個人情報保護に十分留意し、研究途中であっても中止することが可能であることを説明し、同意を得た。

3 結果および考察

3.1 参加者の人数と属性(年代, 性別)

参加者とスタッフの参加人数は、第1回が8名と5名、第2回が6名と4名、第3回が10名と5名であった。従って、全3回における参加者の延べ人数は24名、スタッフは14名であった。最終的な延べ人数は、参加者とスタッフを合わせて38名であった。倉持²⁾は、324件のコミュニティカフェに対してアンケート調査を実施し、継続的な運営に関する課題を複数回答で求めたところ、「利用者の確保」が52.2%で最多とした。

今回のコミュニティカフェは、三原市初の試みであったにもかかわらず、3回の開催で参加者が10名以上得られた。また、第3回目は定員を超えたため新規の参加希望者に断りを入れなければならなかった。このように、参加者を継続的に集客できたこと(成果1)は成果と言えるだろう。しかし、定員である15名を第1回、第2回で集客できなかった。そのため、参加者を継続して確保するために集客方法や内容を工夫する必要がある。例えば、町内会長や民生委員など地域のことをよく知る人に呼びかけの協力を依頼し、コミュニティカフェの目的を明確にして広報活動を充実

させていくこと(課題1)が今後の課題として考えられる。

参加者の性別は女性が多く、年代は70代が多かった(表2)。第3回は、20～70代までの各年代の参加者が1名以上であった。倉持²⁾は、337件のコミュニティカフェへのアンケート調査から利用者の状況を明らかにした。高齢者が66.5%で、20～30代が34.4%で、性別の割合は、「女性が多い」が71.8%、「男性が多い」が4.7%、「男女の割合は同じ程度」が22.0%であった。また、小谷野ら³⁾は、78件のコミュニティカフェの調査から参加者の年齢層は60代が最も多く、次に30代、性別は女性が多く、男性の参加者は少ないとした。一方、山口ら⁴⁾が取り組んでいる「まちかど健康相談室」では、男性の参加者が5割と高く、他の事業で関わった男性への声掛けや男の料理教室など男性が参加しやすいきっかけ作りが重要であると述べている。音なりカフェにおいても、地域の多様な人たちの参加が望まれるため、男性が参加しやすい内容の工夫など、男性へのきっかけ作り(課題2)が今後の課題として考えられる。

3.2 アンケート結果

アンケートの質問内容と結果を表3に示す。アンケートの回答者は10名であった。

3.2.1 音なりカフェについて

音なりカフェは楽しかったかについて、3名が非常にそう思う、7名がそう思うと回答した(Q5)。居心地が良かったかについては、3名が非常にそう思う、7名がそう思うとした(Q6)。音なりカフェが継続された場合に参加したいかについては、1名が非常にそう思う、8名がそう思う、1名が余り思わないとした(Q8)。音なりカフェの運営に携わりたいかについては、2名が非常にそう思う、4名はそう思う、4名は余り思わないと回答した(Q9)。

このように、アンケート結果から、音なりカフェに参加することで「楽しい」「居心地が良い」といった感情面の変化があったと認められた。

村社⁵⁾は、コミュニティカフェに参加する住民ボランティアの継続の推進機能として「楽しい」「居心地が良い」「成長できる」といった感情の変化に伴う活動への没頭や、「得意の実行」「新しい役割の獲得」といった意欲的な試みが必要だと述べている。

今回の試みでは、参加者が継続参加するために必要

表2 参加者の性別と年代

	男/女(人)	20代	30代	40代	50代	60代	70代
第1回	1/7	0	0	1	2	1	4
第2回	1/5	0	0	1	2	2(1)	1(1)
第3回	1/9	1(1)	1(1)	2(1)	1	2	3

()内は新規参加者数

とされる感情面の変化が見られた。また、音なりカフェの運営に携わりたいと思う参加者が6名現れたことは、参加者が運営という新たな役割の獲得を望んでいると考えられる。これらより、成果として、参加者からプラスの感情の変化があったこと（成果2）、運営に対する意欲が生まれたこと（成果3）が挙げられる。

3.2.2 コミュニティカフェについて

コミュニティカフェの理解が深まったかについて、5名が非常にそう思うとし、5名がそう思うと回答した(Q10)。コミュニティカフェへの関心が高まったかについて、5名が非常にそう思うとし、4名がそう思う、1名が余り思わないとした(Q11)。コミュニティカフェを立ち上げたいかについては、1名が非常にそう思う、2名がそう思う、5名が余り思わないと回答した(Q13)。コミュニティカフェの運営に携わりたいかについては、4名がそう思う、6名が余り思わないとした(Q14)。

このように、参加者のコミュニティカフェに関する理解が得られた（成果4）のは、第2回目に地域の課題について話し合いをしたことや、第3回目にコミュニティカフェに関する資料を配布したことが奏功したのではないかと考える。また、コミュニティカフェの運営に携わりたいと考える参加者が現れたことより、新たにコミュニティカフェが三原市で立ち上がった場合、今回の参加者が運営に協力してくれる人材に成り得るのではないかと考える。よって、目的としていた

人材育成について少なからず良い結果が得られたと言えるだろう。

3.2.3 運営や企画に対する自信について

コミュニティカフェの運営に携われると思うかという質問に対し、1名が非常にそう思う、2名がそう思うと回答した(Q16)。人が集まる企画や工夫ができるかに対し、1名が非常にそう思う、4名がそう思う、4名が余り思わない、1名が全く思わないとした(Q17)。また、認知症の人の対応ができるかについて、1名が非常にそう思う、5名がそう思う、3名が余り思わない、1名が全く思わないとした(Q18)。

このように、「運営に携われる」や「人が集まる企画や工夫ができる」と回答する人が現れたことは、元々参加者が運営や企画ができると自信を抱いていた可能性は否定できない。しかし、第3回目にコミュニティカフェに関する資料を配布し、多様な課題を抱えた方が参加することの説明や、認知症の人への対応方法についてミニ講義を行ったことが、多様な課題を抱えた人が来ても運営や企画ができるといった参加者の自信に関与したと考える。（成果5）しかし、運営や企画の工夫に自信があっても実際に運営や企画を実行するには、参加者が「人の役に立ちたい」などと考えるきっかけが必要である。そのため、今後は参加者へ運営参加の動機付け（課題3）を行うことが必要であると考える。

表3 アンケート結果

質問内容	n=10			
	非常にそう思う	そう思う	余り思わない	全く思わない
Q5 音なりカフェは楽しかった	3 (30.0)	7 (70.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q6 音なりカフェは居心地が良かった	3 (30.0)	7 (70.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q7 音なりカフェは今後も続いてほしい	2 (20.0)	7 (70.0)	1 (10.0)	0 (0.0)
Q8 音なりカフェが継続される場合参加したい	1 (10.0)	8 (80.0)	1 (10.0)	0 (0.0)
Q9 音なりカフェの運営に携わってみたい	2 (20.0)	4 (40.0)	4 (40.0)	0 (0.0)
Q10 コミュニティカフェの理解が深まった	5 (50.0)	5 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
Q11 コミュニティカフェの関心が高まった	5 (50.0)	4 (40.0)	1 (10.0)	0 (0.0)
Q12 コミュニティカフェについてもっと知りたい	2 (20.0)	7 (70.0)	1 (10.0)	0 (0.0)
Q13 コミュニティカフェを立ち上げたい	1 (12.5)	2 (25.0)	5 (62.5)	0 (0.0)
Q14 コミュニティカフェの運営に携わりたい	0 (0.0)	4 (40.0)	6 (60.0)	0 (0.0)
Q15 コミュニティカフェに参加したい	1 (10.0)	8 (80.0)	1 (10.0)	0 (0.0)
Q16 運営に携われると思う	1 (10.0)	2 (20.0)	7 (70.0)	0 (0.0)
Q17 人が集まる企画や工夫ができる	1 (10.0)	4 (40.0)	4 (40.0)	1 (10.0)
Q18 認知症の人の対応ができる	1 (10.0)	5 (50.0)	3 (30.0)	1 (10.0)

・表内の数字は人数、()は%を表す。

・Q13 は有効回答数 8 名。

・Q1 は性別、Q2 は年代、Q3 は動機、Q4 は参加回数についての質問であったため表では省略している。

3.3 インタビューとフィールドノートによる結果

第3回の開催後に行った運営協力者2名へのインタビューより4つの課題が明らかになった。なお、語りの内容は斜体で記載した。

3.3.1 運営協力者との目的や内容の共有 (課題4)

「コミュニティカフェで人と人が繋がりを持つのが何のためなのか、孤立した人がいるからってという目的なのか、よく分からなかった。」

「明日来たら500円かかる(普段のカフェでは飲み物を500円で提供している。)なら、イベント(今回は300円で飲み物とお菓子を提供)ってやらなきゃよかった。元々の500円でやって、明日来ても500円ですよっていう方が普段から来られる。」

これらの語りから、運営協力者との開催目的の共有や開催場所の使用法、内容についての協議が不十分であったことが示された。

今瀬ら⁶⁾は、決して一人では運営できないコミュニティカフェにおいて協力者を集めることが重要であり、その条件として、スタッフの運営目的への理解と共感を挙げている。また、共感とは日々の営業だけでなく、スタッフミーティングで培われると示した。また、陣内ら⁷⁾は、共同で運営するカフェの仕組みの中で地域との関係作りが大切だと示し、近所の商売を邪魔しないことを掲げている。地域に根付いたコミュニティカフェの開催を継続するには、地域の中での関係を大切にしなければならない。

今回、運営スタッフは、事前に協力者との打ち合わせを行い、開催目的や内容について説明していた。しかし、その目的や内容を共有するまで至っていなかったと考えられる。事前の打ち合わせをより充実させることや、開催毎のスタッフミーティングなどで再度目的や内容を確認する必要があると考える。運営協力者との意見交換や、参加者の生活に組み込んだ値段設定について再検討する必要があると考える。

3.3.2 運営が成り立つ仕組みの構築 (課題5)

「借りたなら家賃がいるし、買ったならお金がいるし、日常それ(音なりカフェ)を回していくスタッフがいるならそのスタッフの給料がいるし、そういうこと全部が回っていく仕組みを作らないと続かない。」

「来る側も、『500円のコーヒー代なんか払えませんが』っていう人もいるだろうし、そういう人たちを集める場を作るなら、助成金が必要かも。」

これらの語りから、運営が成立する仕組みの構築が今後の課題であると示された。継続していく場合は、スタッフに給料を支払うための資金の調達や助成金の使用についての検討、参加者の経済面を考慮した工夫など対象者を限定することなく運営を継続していくための仕組み作りが必要である。

今瀬ら⁶⁾が、調査した9件のコミュニティカフェのうち、採算が取れているのは2件、収益が均衡状態の

カフェが4件、採算が取れていないカフェは3件であった。会話や交流を促しているコミュニティカフェにおいて回転率を上げることは非常に困難であり、飲食代以外に収益を見込める事業を行う必要がある。ビジネスの視点を取り入れることが必要であり、コミュニティビジネスの収入源として、「事業収入」「委託事業」「補助金・助成金」「寄付」「会費」の5つが紹介されている⁸⁾。

今回は、参加費300円のみを徴収し、その他の資金は公的機関からの助成金を充てた。そのため、今回の価格設定や運営の仕組みでは助成金がなくなった場合の継続は困難である。今後は、助成金に頼らなくても運営できるような安定的に資金を集める活動を行うなど収入源の変更が課題である。継続しているコミュニティカフェを参考にしながら運営の仕組みを確立する必要がある。

3.3.3 スタッフの技能の向上 (課題6)

「主張の強い人中心の話になるから、満遍なく喋ってもらうにはどうすればいいかっていうのは考える必要がある。」

「全体の進行を考える人が一人いた方が良いかも。」

これらの語りから、スタッフが参加者に対し活動への参加を促すような関わりやイベントの際の進行を行うなど技能を高めていく必要があると示された。

倉持²⁾は、コミュニティカフェでは設置するだけでなくスタッフの役割が重要になると示している。利用者と個別に向き合うことや、互いを紹介すること、「共に」場を作り出せるようにするなど多様な働きかけが必要であると述べている。

今回の試みでは、自己紹介やイベントなど活動内容も様々であり、スタッフはプログラムの進行や参加者の調和を保つような働きかけが必要な場面があった。スタッフが目的を達成するための技能を身につけることが重要だが、このような技能は実践することで徐々に身につけていくと考える。実際の場面で進行や対応を試行錯誤しながら、スタッフが参加者を理解し、開催後のスタッフミーティングで振り返り、次の関わり方を考えていくことが必要である。また、席の配置など参加者同士の相性を考えることも必要だと考える。しかし、これら全てを実践していく場合、スタッフの負担が大きくなる可能性がある。また、今回はスタッフに学生が含まれていたため、今後の運営を現スタッフで継続することが困難な状況であった。そのため、カフェの継続を視野に入れ、参加者の中からスタッフの役目を担ってもらうように人材を育成していくことが必要であったと考える。スタッフミーティングに参加者を巻き込んでいくことが求められるのではないかと考える。

3.3.4 参加形態の弾力化 (課題7)

「自由になる時間が1時間ぐらいなので途中参加、退

出自由だと参加しやすい。(30代子育て世代)」

これより、参加形態の幅を広げ、対象とする子育て世代への配慮が必要であると示された。今回は、2時間の開催でイベントを実施したため途中参加、退出がしにくい状況であり、柔軟な参加形態が取れるようにする必要があった。

大塚⁹⁾は、運営するコミュニティカフェでボランティア登録制度を実施しており、その登録者の大半が子育て世代であると述べている。登録の動機では、「子育てしながらも何か社会とつながりたい」とする人が多いとしている。

このように、子育て世代が地域との交流を求めている場合は多く、コミュニティカフェにおいても重要な対象であると考えられる。今回の試みでは3回とも2時間のプログラムを用意し、構造的な内容で実施したため、自由な出入りが困難な状況であった。今後は、イベントではなく気軽に参加し、地域の人が会話を楽しむ程度の緩やかな開催を試みる必要があると考える。また、今回は事前申込制を設けたが、空いた時間に参加できるように申し込み制度の廃止や見直しが必要であると考える。

また、山根¹⁰⁾は、集団の開放度について、成員を固定するクローズドの場合は、課題や共通目標にそって全員で協力する場合に適しているとしている。一方、オープンな集団は、誰でも参加しやすいという特徴があるが、参加者同士の影響が希薄になるとしている。誰もが気軽に参加できることがコミュニティカフェの定義とされているため、オープンな集団であることが望ましいが、参加者同士の交流は必要不可欠であると考えられる。そのため、多少の参加者の出入りがありながら継続されるセミクローズドな集団であれば、利用の主体が参加者となり、コミュニティカフェの目的に沿った参加の自由度となるのではないかと考える。

4 成果と課題のまとめ

以上の結果及び考察で記述したコミュニティカフェ運営における成果と課題をまとめると以下ようになる。

4.1 成果

- ・参加者を継続して集客できたこと
- ・参加者に「楽しい」「居心地が良い」といったプラスの感情の変化があったこと
- ・音なりカフェやコミュニティカフェの運営に携わりたいとする参加者が現れたこと
- ・コミュニティカフェに対する理解が得られたこと
- ・参加者へ運営や認知症の人への対応について自信を与えることができたこと

4.2 課題

- ・広報活動の充実
- ・男性参加者へのきっかけ作り
- ・参加者への運営参加の動機付け
- ・運営協力者との目的や内容の共有
- ・運営が成り立つ仕組みの構築
- ・スタッフの技能の向上
- ・参加形態の弾力化

5 研究の限界

今回の研究では、コミュニティカフェを施行し成果と課題をアンケートとインタビューにより明らかにした。しかし、アンケートは第3回目の参加者のみに配布したため、継続して参加していない対象者の意見が影響を与えていることや、アンケートは無記名回答としたもののスタッフが側にいる状況で回答を求めたため、参加者が好意的に回答した可能性は否定できない。更に、本研究でのコミュニティカフェの参加者は年代や性別の偏りがあったため、倉持が言う多世代が自由に過ごすことができるコミュニティカフェとは異なる点があったことも否定できない。様々なコミュニティカフェがある中で、今回のコミュニティカフェが、課題をクリアしながら三原市に定着することが望まれる。

文献

- 1) 厚生労働省：市町村による新しい地域づくりの推進（生活支援・介護予防の充実）. 厚生労働省, (オンライン), 入手先 <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutan/0000030657.pdf>, (参照 2019-10-23)
- 2) 倉持香苗：コミュニティカフェと地域社会へ支えあう関係を構築するソーシャルワーク実践－東京, 明石書店, 139-169, 2014
- 3) 小谷野結希, 竹原彩, 室田昌子：コミュニティカフェの運営実態とタイプ別の課題に関する研究－1都3県を対象に－. 公益社団法人日本都市計画学会 都市計画報告書 No.15, 337-340, 2017
- 4) 山口はるみ：まちかど健康相談室(栄養ケア・ステーション). 地域リハビリテーション, 12: 892-895, 2018
- 5) 村社卓：高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに参加する住民ボランティアの継続特性－ボランティアの「楽しさ」に焦点を当てた定性的データ分析－. 社会福祉学, 58: 32-45, 2018
- 6) 今瀬和哉, 松行美帆子：コミュニティカフェの継続に必要な条件についての一考察－横浜市・川崎

- 市のコミュニティカフェを事例として－. 都市計画報告書, 13:151-155, 2015
- 7) 陣内雄次, 荻野夏子, 田村大作: コミュニティカフェと市民育ち－あなたにもできる地域の縁側づくり－. 東京, 萌文社, 119-122, 2007
- 8) NPO 法人コミュニティビジネスサポートセンター: コミュニティビジネスとは?. NPO 法人コミュニティビジネスサポートセンター, (オンライン), 入手先 < <https://cb-s.net/about/> >, (参照 2019-11-01)
- 9) 大塚朋子: 「困った!」ではなく「やってみたい」を大切に－まちの担い手が育つコミュニティカフェを目指して－. まなびあい, 11:232-236, 2018
- 10) 山根寛ほか: 「ひと集団・場」－ひとの集まりと場を利用する－. 東京, 三輪書店, 60-61, 2007

Operating a trial community café: Achievements and challenges at Otonari Café

Namie YAMAMOTO^{*1} Seiji NISHIDA^{*2} Riho AYA^{*3}
Kana KURIKAWA^{*4} Mizuki MATSUMOTO^{*5}

*1 Department of Rehabilitation, Hiroshima Central Rehabilitation Hospital

*2 Department of Occupational Therapy, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

*3 Department of Rehabilitation, Mitoyo City Nishikagawa Hospital

*4 Department of Occupational Therapy, Mihara Hospital

*5 Department of Rehabilitation, Fukuyama Rehabilitation Hospital

Received 25 August 2020

Accepted 24 December 2020

Abstract

In this study, we discuss the trial run of a community café we operated in Mihara city. To assess the achievements and challenges encountered during the trial, we conducted a questionnaire survey of participants, interviewed collaborators, and exchanged field notes. The results of the survey were then analyzed quantitatively and qualitatively. We identified a few achievements: “the participants were able to continue to attract customers,” “the participants had emotional changes such as ‘comfortable,’” “some participants desired to support the café,” and so on. As for the challenges we faced during the trial run of the community café, we found a few things of importance: the need for “sharing of purpose and content with management collaborators,” “a robust management system,” “motivation of participants to participate in management,” and so on. After the survey, we considered it necessary to collaborate with local residents at the startup stage to build a relationship of mutual support at the community café.

Key words: community café, management, local, collaboration